



自然にとけ込むように、あえて木々の間に計画した



滑り台も手作りで。



デッキに木陰が落ち、涼しく、またその時の表情になる。



施設を守るのは、利用者だって良い！

川西市黒川、景観地区にも指定されるこの地域の公民館の裏山に誰でも使えるウッドデッキがあった。
かねてより利用されてはいたが老朽により使用不可となり数年。管理者より、また子供たちが集まって遊べる場所にしてあげたいと相談を受けた。

木材を使う点での管理の手間、また公共的に使うことでの予算の難しさなど聞き、それならばいっそのこと「扱い方」から考えようと話し合い、その在り方・守り方を再構築した。

管理者が願い、工務店が計画・段取、利用者が自ら作り、利用者が守り続けていく。

地域の施設の在り方からデザインした、みんなのウッドデッキ。

DIYに興味はあるけど、やったことなかった。 そんなみんなが手刻みで作った杉のウッドデッキ。

工務店が設計、材料を手配。複雑な箇所は大工が墨付けを行い、その後プロの監修のもと、危ない機械を使わず素人である参加者が鋸・鉋・鑿を使って全ての加工を施し、自ら現地まで運搬。
 何度も材料を加工しおしながらの組付けを行い、みんなでデッキを完成させた。
 簡単に作るのではなく、手間と時間をかけてでも、しっかりと良いものつくことを念頭に置き、端材を使っての道具の使い方の練習から行った。

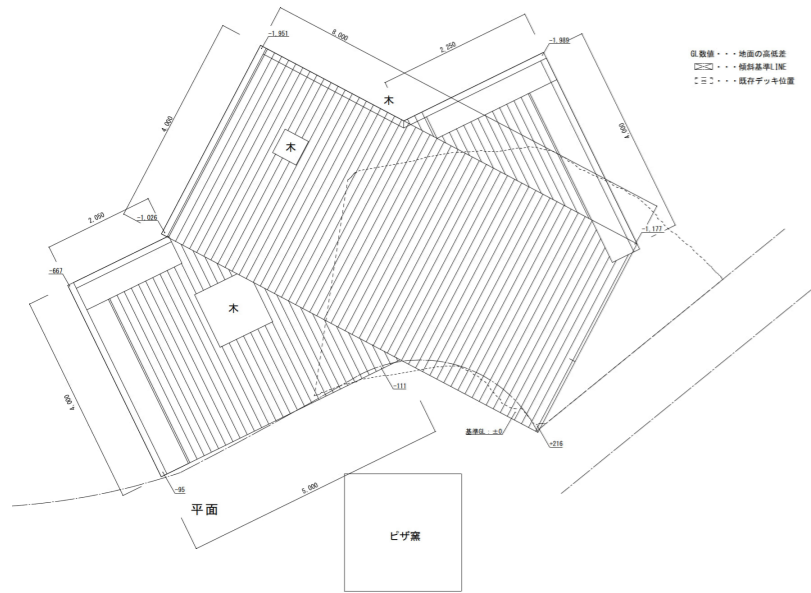
大人も子供も関係なく、出来ることを全部やる。 子供が遊ぶ場所だから親は真剣に安全を考えトゲを探し、削る。
 子供は「これ難しい」と思ったら他の出来ることを探す。 子供に戻った大人は、それはもうデッキづくりに没頭する。

3か月に渡り集まって作りあげられたこのデッキは、今後も利用者がメンテナンスを行う。
 前回は2021年12月に全体の洗いと塗装を実施、次回の再集結は2023秋、計画している。

自然の中に建てるにあたり湿気に対する対策と、提示の予算で満足いくモノを計画するために。

今回、在り方を再構築するために、まずは長く持つものでなければならないと考えた。
 湿気対策として、柱の足元の加工計画を始め、仕口の選択、材料の選択する上でも素人が加工でき、かつ計画者として責任の持てるラインを模索し実施、加工についてはやり直し前提で仮組も行いつつ作業を進めた。

また予算についても極力抑える必要があったため、当時募集されていた「過剰木材在庫利用緊急対策事業助成金」を利用した。
 該当条件にJAS規格のものが必須であったため、国産杉の加圧注入材を取り寄せ、当計画に使用した。



所在地 : 川西市黒川 旧黒川小学校の裏山
 使用材料 : 国産杉の加圧注入材 (JAS規格)
 参加者 : およそ30人
 敷地面積 : 広大
 デッキ面積 : 46.9㎡

ただウッドデッキを作るのではなく、「作って守る、流れからデザインし、実現する」

自然の中で主張しすぎないデザインと、やれば出来るギリギリの加工難度を計画。やり直しも考え、材料の材寸をなるべく整える。

木のことを伝えながら、道具のことを伝えながら、今後みんなで守るんだよと伝えながら、やれば出来るという自信と、大工の加工技術の高さを自らの手で体験してもらう。これは体験授業ではなく、本当に自らが施工者となってもらう為、すべての作業を指示と見守りに徹した。回数を重ねるたびに道具の扱いにも慣れてゆき、そして電動ドリルの所有者が増える。

完成後も、定期的に再集結、清掃・全体の塗装などを行っている。利用者と共にメンバーが増えている。こうしてこのウッドデッキが守られる

